Ⅳ-216

高齢化社会における児童公園の利用方策について

秋田大学　正　員　　清水浩志郎
秋田大学　正　員　　木村　一裕
秋田大学　学正員　○古山　広功

１．はじめに

近年のわが国の平均寿命の伸びは著しく、それに伴って人口構造の急激な高齢化が引き起こされている。こうした高齢化社会においては、年金、福祉、医療、雇用問題など様々な問題が予想され、どちらかといえば暗いイメージでとらえることが多い。しかし、これは逆に知識や経験の豊かな重厚で安定した社会、成熟した社会を迎えつつあると考えることもできる。高齢化社会を考えるとき、その高齢者層に蓄積された豊富な知識、経験を社会に還元してもらうことが重要となってくる。そのためには、何かとひきごもりがちな高齢者の積極的な社会参加できる社会環境、街づくりが必須条件となる。

高齢者によってよく利用される施設としては、老人福祉センター、老人憩いの家、スポーツセンター、体育館、運動場、公民館等が考えられるが、これらの施設は地域にひとつあるか、あるいは全くないこともある。そのため、行動範囲の狭い高齢者にとっては利用しにくい施設も多い。今後、高齢者の積極的な社会参加を促すには身近に利用できる施設を考えることも一方策である。そこで、設置箇所が多く、身近に利用できる施設として児童公園（250m間隔に設置）に着目した。それは都市部の児童公園が必ずしも有効に利用されているとは言い難くまた、子供と高齢者が共用できる都市施設が今後必要と思われるからである。

２．児童公園のライフサイクル

児童公園の利用形態は、その利用者の年齢によって、いくつかの利用期を形成すると考えられる。たとえば新興住宅地のような地域住民の平均年齢の若い地域では、親に伴われた幼児の利用が主であるが、地域住民の平均年齢が高くなると児童中心の利用へと移行していく。また、一般に都市部の旧市街地においては、幼児・児童の利用がみられず、児童公園が放置された状態になる。これは地域住民の平均年齢の上昇、いわゆる地域の高齢化によるものと考えられ、今後このような児童公園を都市計画の観点でどのように活用するかが重要な課題となる。そのひとつの方法として、高齢者と子供が共用できる児童公園を提言したい。

児童公園の使われ方を、その利用形態で分類すれば表－1のようになる。幼児の利用が中心となる第一期利用、小学校低学年の利用が中心となる第二期利用、小学校高学年の利用が中心となる第三期利用、そして本研究で提案する高齢者の利用が中心となる第四期利用である。つまり、本研究では、児童公園の使われ方には、第四期利用を含めたひとつのライフサイクルが形成されると理解し、より有効な公園利用を提案するものである。

表－１　児童公園の利用期によるライフサイクル

公園利用期	利用者	代表される利用目的	現在ある施設	その他考えられる遊び
第一期利用	幼児	砂遊び	遊具 ブランコ・スベリ台 鉄棒・砂場・回転塔 ジャングルジム 砂山 広場	水遊び 岩のぼり 木のぼり
第二期利用	児童（低学年）	遊具の利用		
第三期利用	児童（高学年）	キャッチボール等の運動	植木・芝生	雪遊び ソリ スキー
○中学生以上になると児童公園の利用はほとんどみられない。 ○大人は幼児と一緒以外は利用がほとんどみられない。				
第四期利用	高齢者	ゲートボール 休憩、散歩	広場 ベンチ	?

３．調査目的

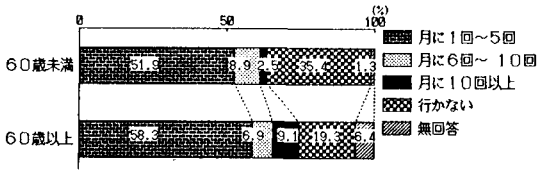
以上のような認識から、高齢化社会における児童公園の利用方策に関する調査を行い、高齢者による現在の児童公園の利用形態と今後の児童公園のあり方について分析することを目的としている。アンケートは秋田市の20歳以上の人に対して実施し、分析には回答者266人（60歳以上187人、60歳未満79人）のデータを用いた。

４．分析

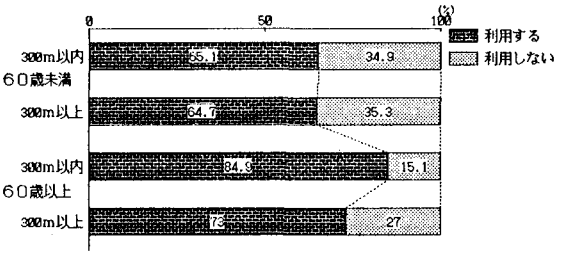
（１）利用実態

高齢者の公園利用率は図－1からわかるように7割強と高いが、利用回数からみると月に1回から5回が

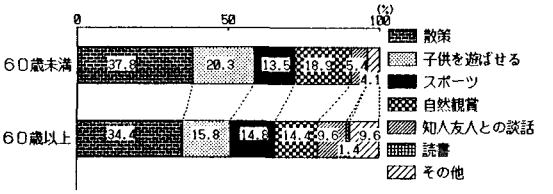
58.3%とまだまだ少ないことがわかる。また、行動範囲が狭い高齢者にとっては施設までの距離が重要な要素になると考え、利用率との関係を図－2に示した。これによると60歳以上では300m以上で1割程度の低下がみられるが、60歳未満と比較しても高い割合となっている。これは児童公園が、高齢者にとって身近に利用できる施設であること示している。これらの児童公園の利用目的を図－3に示した。このように、60歳以上、60歳未満ともに同様な傾向がみられるが、高齢者層において、「スポーツ」、「知人友人との談話」、「その他」の項目が若年層と比較して割合が高く、また若年層にはみられない「読書」という項目もあり、高齢者には多彩な利用がみられることに特徴がある。



図－１　１ケ月における児童公園の利用回数



図－２　距離と利用状況の関係

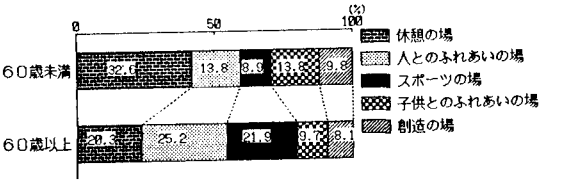


図－３　児童公園の利用目的

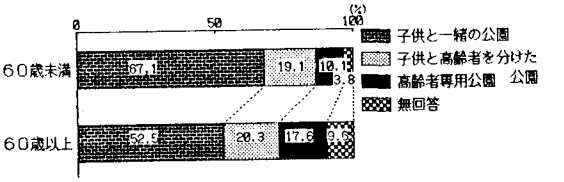
（２）今後の児童公園に対する利用意識

今後児童公園をどのように利用したいかについてを図－4に示した。このように60歳以上では「人とのふれ合いの場」(25.2%)、「スポーツの場」(21.9%)が60歳未満と比較して高く、高齢者が主動的な利用を希望していることがわかる。また、児童公園における子供との共用については、図－5に示した。いずれの年齢層とも、半数以上の人が子供との共用を考えているが、60歳以上では高齢者専用公園を希望する人が17.6%と60歳未満と比較して高くなっており、高齢者だけによるより積極的な利用を希望している人もみられる。

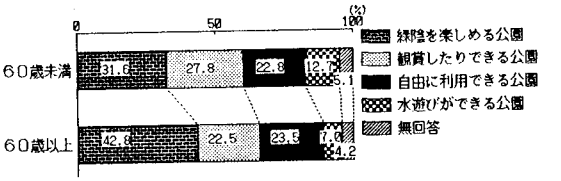
最後に児童公園はどうあればよいかについては図－6に示した。いずれの年齢層とも、「緑陰を楽しめる公園」、「緑を観賞できる公園」のふたつでほぼ６割を占め、公園は緑多いものではならないとの強い意識がみられる。



図－４　児童公園をどのように利用したいか



図－５　どのような児童公園がよいか



図－６　児童公園はどうあればよいか

５．むすび

本研究では、高齢化社会における児童公園の位置づけを明確にし、高齢者の公園に対する現在の利用実態と今後に対する意識を分析し、高齢化社会における児童公園のあり方を考察した。その結果いくつかの示唆すべき点を得た。今後、公園のライフサイクルの中の利用期別により詳しい調査、分析を進めたいと考えている。

（参考文献）

１）秋田市の公園緑地　昭和60年3月
秋田市都市開発部公園緑地課